

緊急時の心臓マッサージは、持続的でも間欠的でも転帰に差なし

院外での心肺停止の患者に対して救急医療スタッフが心肺蘇生を行う場合、断続的に行う徒手的心臓マッサージは、血流量や生存率を低減させる可能性がある。本研究では、胸部圧迫と陽圧換気を連続的に行う心肺蘇生と、胸部圧迫を30回行い換気を2回行う間欠的な心肺蘇生の場合で転帰が異なるかを検討した。

114の救急医療事業者を対象に、クラスターランダム化クロスオーバー試験を実施した。非外傷性心停止の成人で、救急医療スタッフが心肺蘇生を行った患者23,711例について、持続的胸部圧迫を行った群（介入群；12,653例）と間欠的胸部圧迫を行った群（対照群；11,058例）に割り付けた。退院時に生存していたのは、介入群で9.0%、対照群で9.7%となり、両群間に有意差はなかった（群間差-0.7ポイント； $p=0.07$ ）。退院時に神経学的機能が良好だった人の割合は、それぞれ7.0%、7.7%と有意差はなかった（群間差-0.6ポイント； $p=0.09$ ）。なお在宅生存期間は、介入群が対象群に比べ有意に短かった（平均群間差-0.2日； $p=0.004$ ）。

したがって、院外での心肺停止の患者に対し、救急医療スタッフが持続的胸部圧迫を行っても、間欠的胸部圧迫の場合と比べて退院時の生存率や神経学的機能が良好である確率は高くないことが示された。

出典：The New England Journal of Medicine. 2015; 373(23): 2203-2214